

平成26年度 労働災害防止論文 **金賞**

通勤災害体験と対策

北海道クリーン・システム株式会社 片山 剛

平成25年3月、早春、路上のアスファルトも現れだした早朝、あの悪夢は起こりました。いや、自分の不注意で起こしてしまいました。警備業に転職し、1年近くたち、「この仕事にも慣れ、これからも頑張るぞ！」さらに新しい勤務地に赴任し、見習いの研修期間も今日で終わりど気合いも入っていました。(今思うとこんなときこそ要注意だったのですが)

その日は、数日続いた春めく陽気とは一変し寒い朝。いつもどおりの時刻にいつもどおりの道をいつもどおり重い荷物を持ち歩いていました。ただ、いつもと違ったのは、「ちょっと早く行って仕事の流れを復習しよう。」と不意に思ったことでした。電車を降り、大股の速歩で歩いていたとたん、急に身体が宙に浮き、肘から地面に転倒。ブラックアイスバーンに足を滑らせてしまいました。激しい痛みを感じながらも我慢して勤務に就きましたが腕が上らず、その日の勤務を休んで病院へ行くと骨折の診断。職場復帰まで1ヶ月とのこと。以前に他の人の通勤災害の話聞いてはいましたが、「自分には関係ない。そんな事するはずない。」と対岸の火事の扱いでした。翌日から現場では勤務変更に伴う同僚の負担増。仕事が出来ない＝収入がない＝家族をどうしようという不安。さらにオーナー様は、復帰後再度、研修のやり直しを命じ、不信感を抱き信頼失墜。何故「急ぐとき

ほど慎重にならなかったのか。」と反省しても後悔先に立たず。本当に、事故は自分の心理状態をコントロールすることで、起きもするし、防ぐこともできると痛感しました。「あせるときほど慌てずに。」「いつもと違うときこそ慎重に。」まさに事故は自己と一体です。殆どの事故は人間の行為で起こります。従って防ぐのも人間の行為によってです。しかし1ヶ月の自宅療養中、冷静に考えたことによって、事故を「対岸の火事」ではなく「他山の石」と捉えられるようになり、この論文も積極的に書きました。

事故発生によって、まず第一にオーナー様(お客様)の不信感が生じ会社の信頼が揺らぎます。金銭で測ることのできないマイナスです。次に会社経費としての労災保険料等の負担増。目に見えるはっきりとしたマイナス。さらに勤務変更による同僚たちへの肉体的、精神的な負担。家族に抱かせた収入や生活への不安な気持ち。

お客様の安全確保のため、日夜従事している全ての方々へ。事故防止の最大の対策は自分、自分の心です。起きた後に後悔しても巻き戻しはできません。過去の教訓(事故事例)を「他山の石」として自分を磨き、仲間と共に高め合いましょう。全ては私達の生活の糧であり収入源でもあるお客様への安全、安心、信頼のために。

平成26年度 労働災害防止論文 銀賞

「ヒューマンエラー」を防止するために

東京美装北海道株式会社北見支店 佐藤 光 春

「ヒューマンエラー」という言葉をご存知ですか？日本語で言えば「人為的間違い」ということです。ビルメンテナンス業界においても、70%以上がこの人為的ミスにより、災害が発生しているのではないのでしょうか。

例えば自動車の運転ですが、自動車は機械ですが運転するのは人間です。いくら性能の良い車でも運転する人間に不注意があれば、交通事故を起こし、人命にかかわる事故につながることもあります。

では、ヒューマンエラーは、どのような時に起こるのでしょうか。様々な要因がありますが、最も考えられるのは「慣れ」です。免許を取得し、初めて運転する時は、交通ルールはしっかり守り、安全意識を持って運転します。何より運転者が、自分は未熟であることを自覚し、安全意識に細心の注意を払っていることが一番の理由だと思います。

私たちにとっても、入社後少し余裕が持てる時期が一番危険だと思います。

「まあ、これくらい大丈夫だろう」

「自分ならできる」

「少くからマニュアルを無視してもいいだろう」

しばらく経験を積むと、自分の技術や知識を過信してしまいがちです。

ヒューマンエラーを防ぐために、次のことに注意しましょう。

「慣れたところが一番危ない」という事実です。人間ですから、慣れによって緊張が解けるのは、仕方がないのかもしれませんが、しかし「慣れたところが一番危険」という事実を知っていれば、安全意識の低下を予防できると確信しています。

次に、「手順を省略しない」というルールを徹底することです。

何かを省略したときにエラーが発生する可能性が大きくなります。毎回同じことを繰り返していると「手順を少くから省略しても大丈夫だろう」という甘い考えが出てきます。慣れると基本的な手順をおろそかにし、支障が出ない程度に省きたくなります。そのために、「手順書」と「約束事」は非常に重要です。

人によって作業の進め方に違いが出ると、出来上がる仕事の結果にもバラツキが多くなります。作業の進め方を統一させる為にも、「手順書の順守」と「約束事の死守」を徹底します。そして、いつも同じ作業をすることにより、体が自然に“安全体勢”を確立します。そこにはヒューマンエラーの入り込む余地は少なくなります。

また、他の人が起こした失敗は絶対あなたのためになります。ヒューマンエラーの事故事例を参考にし、あなたの代わりにミスをしてしまった方の失敗経験を活かしましょう。失敗によって学ぶことは、成功以上に大きいものです。

平成26年度 労働災害防止論文 銅賞

ヒヤリハットを防ぐ基本動作

北海道クリーン・システム株式会社 田 河 夏 美

私が勤めている「札幌ステラプレイス」は北海道最大級の施設JRタワーのひとつであり、地元のお客様はもちろんのこと、道内外からのお客様、近年では海外からの旅行者も大変多くなっております。

その中で私はTコメントとして、お客様のご案内などのサポートや、館内の美観を維持し、オーナー様の「安心・満足・感動」を実現するため日々精進しておりますが、『ヒヤリハット』と常に隣り合わせでもあります。ビルメンテナンス業務の従事者として、いろいろな事態を予測し、行動せねばなりません。

私の体験として、ガラス扉の拭き作業を行っていた際、一番端のガラス扉を拭き上げ閉めている最中、内角から男性のお客様が勢いよく入ってきたのです。その場所は柱があり、内角からではお客様が見えない死角でした。しかし、何度も周囲を確認した上で、「もしかして」という気持ちでゆっくり閉めていたため、反応することができました。もしこれが注意散漫で勢いよく閉めていたら、あと数秒でも反応が遅かったら、お客様に怪我を負わせていたかもしれません。改めてヒヤリハットは身近に潜んでいるのだと常に意識をすることで、お客様へ「安心・満足・感動」を提供できるのだと感じました。

業務に慣れてくるにつれて、「ここは人が来ないから大丈夫だろう」など身勝手な判断をしまいがちです。しかし、それはお客様の安全はもちろんのこと、自分自身の安全も失って

しまいます。一瞬の判断で信頼を失い、長い時間を掛けて信頼を取り戻すのは容易ではありません。今回はちょっとしたヒヤリハットで済んだとしても、次は大きな事故に繋がりがねません。未然に防ぐために、その『ちょっとしたヒヤリハット』をディスカッションし、しっかりと皆で共有し注意し合っていくことで、初めて安全が確保されていきます。

また体験だけではなく、予測することも重要だと思えます。私は新人教育をさせていただくこともあり、その際に作業を実際に行ってもらいながら、新人と共にどのような危険が潜んでいるのか予測します。角を曲がる時は必ず一度停止をし、周囲を確認する。最近増えてきている「ながら歩き」のお客様と接触するかもしれません。モップ作業時も後ろを確認しながら進めていく。モップの柄がお客様だけではなく、壁やガラスにぶつかって破損させてしまうかもしれません。

基本的なことかもしれませんが、これらの基本が身につけていなければヒヤリハットを予測し、また対応することはできません。

4月からJRタワーTコメントとして始動しましたが、以前の業務よりも増してお客様と接することが多くなりました。それに伴い、ヒヤリハットを体験することも皆増えてきています。それぞれが体験したことを共有し、「安心・満足・感動」を提供できるよう全員が一丸となって取り組んでまいります。

平成26年度 労働災害防止論文 佳作

労働災害防止対策への提言

株式会社 キタデン 大 竹 重 弘

北海道登別市にある病院の温泉水をためるタンクで、死亡して見つかった2人の男性はいずれも病院の施設担当の職員と分かった。タンクの周辺では硫化水素が検出されたそうだが、このような事件はふと気を抜くと起きるものなのだと実感したのである。

私は地下ピット内で配管清掃などを手伝うことがある。最初、人が入る前に先に酸素濃度計を入れる。確かにいつ見ても酸素濃度値が規定値に達している。ここで、温泉タンクの例を思い出したのだ。もしかしたら、いつか腐敗した物質が溜まるかもしれない。安全なものでもいつ危険なものに変わるかわからないと思う事が重要なのだ。病院の温泉水をためるタンクの周辺では硫化水素が検出されたとあるが、何故温泉と言え、硫化水素に気付かなかったのであろうか。大丈夫であろうと思って基本に忠実でなく慎重さに欠ける様な事を点検や作業の中で行えば、結果的に労働災害につながっていくのであろう。だから、常に最悪の場合を想定することが労働災害回避策となるのである。私は点検や作業の際、常に落ち着いて行動しかつ、危険予知をするように努力している。例えば、送風機の外観点検の際、異音や、ベルトの掛かり具合等を見ることに気を取られて、モーター回転部分に近い安全カバーの上部に手を載せる。受変電点検で変圧器の温度を見る時、体を乗り出して変圧器の充電部に触れる。ドア修理の際、ドアチェッカーを調整中に誰かがドアを開けて

指を挟む。作業の為、発電機を台車から降ろす時に誤って足の上に落ちる。酸素濃度測定をしない地下ピット内に人が入る等の危険行為を想定するが、労働災害になることは次々と現れるものだ。フィルター交換等を行っている時、脚立の開脚防止金具が作業灯のコードに引っ掛かり外れたことがあった。慎重かつ基本通り脚立の開脚防止金具を両方に装着していた事で救われたのである。点検や作業の際、点検対象はもちろんかつ周囲の状況把握も怠らない事である。例えば、駐車場の誘導標識灯で古くなった蛍光管を交換する事があります。こういう作業の場合は蛍光管交換担当と交通誘導担当に分けて作業を迅速に行う。その際、なるべく自動車の通らない時間帯に作業を行います。それでも、自動車は時々通りますので、蛍光管交換担当の方は交換作業に集中しつつ、かつ誘導灯担当の声や周囲の状況に目や耳を傾ける事が大切である。これをする為には、とにかく慎重に落ち着いて行動する事である。

「災害は忘れた頃にやってくる」という慣用句がある。読んで字の如くである。災害が起きてから戒めても遅いのでさらに「人の振り見て我が振り直せ」という故事成語を思い出す。他人のやっている行動を自分の事として省みることである。命を失ってからでは遅いのだ。私はこれからも労働災害のない安全な作業を心がけて、真の施設管理マンに近づけるように日々精進してまいり所存である。

平成26年度 労働災害防止論文 佳作

転倒事故による業務災害

東京美装北海道株式会社 芳賀俊哉

ビルメンテナンスにおいて安全は、お客様から信頼を得る最大の武器である。

ビルメンテナンスにおいて業務災害は、転倒が圧倒的に多い。清掃中の濡れた床面に転倒する危険は私も経験したことがある。

また、不安定な作業姿勢、焦り、高齢者の割合が高い、など様々な要因により業務災害は発生している。その中でも、高齢化はさまざまな身体機能が低下し業務災害につながっている。

なかでも平行機能の低下は顕著で20歳代を100%とすると50歳代でおよそ48%にまで低下しており、視力においても、薄明順応（暗い所に入った際により早く暗さに順応して物が見えるようになる能力）も36%に減少しており、これらより、高齢の労働者は、ふらつきやすく、段差や階段などの認識において特に注意が必要であることを示している。

転倒の原因としては、「すべって」は約40%、「つまずいて」が32%、「自分の反動で」が約10%と、「すべって」「つまずいて」「自分の動作の反動」の合計で約8割を占めている。

これらから、転倒の対策を考える際には、「すべり」「つまずき」を軸に考えていくことが大切である。転倒災害のリスク要因として、人間側の身体特性に関わる「内的要因」、人間に取り巻く環境の「外的要因」、労働者が働く「社会・管理的要因」があげられる。なかでも、

ビルメンテナンス業における最大の要因は「社会・管理的要因」であると私は考える。「社会・管理的要因」とは整理・整頓、規則違反、焦りなどが主な原因のリスク要因である。

さらに、北海道では凍結した路面なども転倒の原因である場合がある。駐車場から職場の入口までの短い距離を歩行中に、凍結した路面で転倒して骨折などの重傷を負うケースもある。

これらの転倒の対策として我々は、

- 1、4S（整理・整頓・清潔・しつけ）を徹底
 - 2、段差解消
 - 3、照度改善
 - 4、通路や床に滑り止め剤入り塗料塗布
 - 5、作業靴は、耐滑性の高いものを使用
 - 6、バランスや敏捷性などの運動機能を高める
体操などを定期的実施
- 冬場の転倒に対しては、

- 1、凍結路面に凍結防止用の砂などを撒く
- 2、時間に余裕を持つ
- 3、履物は、滑り止め材入り、ピン・金具付き・溝の深いもの等滑り難いものを着用などを実践していかなければならない。

業務災害の中で一番多い転倒は、業務中のみならず、通勤中や日常生活にも危険が多い。上記の対策をとることにより、建物管理をしている我々にとっては、お客様への安全対策を行っていることと同じであると思う。

平成26年度 労働災害防止論文 佳作

ヒヤリ・ハット体験と対策

北海道クリーン・システム株式会社 小野元一

私は、入社10ヶ月の従業員です。業務内容は、JR北海道が運行している道内特急列車の車内販売商品の運搬と在庫管理です。

今回は、商品保管場所と札幌駅ホーム間の運搬作業に注目したいと思います。

商品を運搬する台車は、鉄製で商品を積載すると総重量は360キロになります。

電動モーターが動力で、速度はレバーで調整でき、最も早い速度で走行すると、初心者がビックリするほど早いです。台車の操作に慣れるまでは常にヒヤヒヤ状態が続きます。

この商品運搬作業ですが、台車操作以外にも人、車の動きに注意し、触車事故が起こらない様に操作しなければなりません。一旦事故となると大きな災害となります。

私が入社して間もない頃は、この作業の時は、特に気疲れしていたのを思い出します。

今現在は、台車操作に関する気疲れは軽減されましたので、以前よりも人、車の動きに注意することに力を注げる様になりました。

しかし、どうしても私達が商品運搬している際、台車の存在に全く気付かない人達がいると言う現実です。例えば、携帯電話を使う人、耳にイヤホンをつけている人、会話に夢中になる人などです。入社当時は、この様な人達に注意を払い、心に余裕がなかったので接触しそうに

なりヒヤリとしました。

この様な状態が続けばいつかは大きな災害となるので、私なりに、台車操作時の条件を設定して、安全に台車を移動させる取り組みをしました。人との接触事故防止のためには台車の存在に気付いてもらう事が大切です。

さらに重要なことは、人や車が接触してきたら台車の徐行運転を行い、ただちに台車を停止させる事が重要と考えています。

台車進行方向の半径5m以内に人や車が進入した際、徐行運転とし、直ちに停止する事を実行しています。

実際に商品運搬中に実行することで、心にゆとりが出来、人や車に接触しそうになりヒヤリとすることは、圧倒的に少なくなりました。

心にゆとりができた事で、新たな問題も見えてきました。運搬経路周辺の人の多さに比例して、台車の存在に気付いてもらいにくくなるという事です。

個人的な取り組みですが、現在は、人が多い時に、どの様にしたら台車の存在に気付いてもらえるかをテーマに取り組んでいます。

最後になりますが、ヒヤリ・ハットを減らす活動は、事故が起こりにくい環境を想像でき、労働における精神的、肉体的負担も減らせる事を今回改めて実感しました。

平成26年度 労働災害防止標語 入賞者

金賞

うまくやるより確実に 早くやるより安全に ゆとりを持って安全作業
東京美装北海道(株)千歳支店 阿部 かをり

銀賞

焦らない 急がない 慌てない 危険はいつもすぐ側に
北海道クリーン・システム(株) 氏家 ユリ子

ゼロ災害 ^{あした}未来につなぐ 合言葉 北海道互光(株) 下坂 登

銅賞

安全は 守る勇気と 続ける努力 みんなで築く 無事故の職場
東京美装北海道(株)北見支店 谷本 美智子

あいさつは 笑顔で明るく 心から 北海道互光(株) 成田 道信

見る目 気づく目 注意の目 違う視線で危険予知
北海道クリーン・システム(株) 新田 彩子

佳作

安全と 思っているでも再確認 事故の芽なくす 責任感
北海道クリーン・システム(株) 佐藤 真奈美

明日は我が身と気を付けて みんなが思えば「ゼロ災害」
北海道クリーン・システム(株) 水越 恭子

安全は目配り気配り思いやり守る職場に事故はなし
協和総合管理(株) 川口 君代

過去の教訓 共有し みんなで達成 ゼロ災害
日本クリーン北海道(株) 酒井 和子

災害は 慣れと 手抜きと 気のゆるみ
北海道クリーン・システム(株) 長谷川 俊之

危ないと、思った時にすぐ改善、みんなで築こうゼロ災を
東京美装北海道(株)網走営業所 川口 達也

あせる気持ちか けがのもと 心のゆとりで 安全作業
 日本クリーン北海道(株) 関原 真菜美

あいさつは 心と笑顔の 潤滑油 (株)ベルックス 佐藤 建

安全は無理なく 慣れなく 過信なく 重ねて築く無災害
 北海道クリーン・システム(株) 丘島 高德

“かもしれない” 早めに摘み取る危険の芽
 北海道クリーン・システム(株) 三浦 由実子

これでいいのかこの作業 そう感じたら赤信号 止める勇気と聞く勇気
 (株)アサヒファシリティズ北海道支店 林 諭 克

ゼロ災害 皆で達成 職場の誇り 日本クリーン北海道(株) 渡部 秀樹

断ち切ろう 油断と 無理と 無責任
 北海道クリーン・システム(株) 浜本 孝子

できるはず 自分が変われば相手も変わる きっと広がる思いやり
 (株)ベルックス 早坂 郁美

はぶくな 頼るな まかせるな 安全確認 自分から
 北海道クリーン・システム(株) 小川 好恵

引き締めよう 慣れた作業に 落とし穴 北海美掃(株) 三上 光子

見えぬ死角を 見つめる目 心のゆとりが 身を守る
 日本クリーン北海道(株) 斉藤 裕子

磨こうよ 危険を感じる 感受性 見つけよう きっとまだある 改善点
 日本クリーン北海道(株) 鎌田 国彦

ゆとりある、気持ちと作業で、無災害
 東京美装北海道(株)網走営業所 西濱 勝彦

油断と過信が事故を呼ぶ 事前に確認 危険予知
 北海道クリーン・システム(株) 中島 喜久子